ドイツの方言辞書とその地域区劃

——国語方言学のために——

小島公一郎

1、はしがき　前世紀末に至る前史

ドイツの方言研究には、本邦のそれと一味相通う主方向がある。それは語史・民族史の解明という課題に関するものである。ヤーベルクは、かかる点からであろうが、フランス言語地理に比して、ドイツのそれを、より純粋でない、とする。[1] 言語学的には、なるほど純粋であるまいが、しかしこの傾向は、ドイツにおいて、歴史的必然として、又学的欲求として生じたものである。ましてや姉妹語に乏しく、外に向っては、容易なことでは正しき比較の対象を求め難い日本語の場合、「言語層位学」[2]としての言語地理、乃至方言研究は、特殊な、極めて重要な任務を帯びるものであること、あらためていう迄もない。

方言の研究に際して、まず語彙集・辞書の編まれることは、洋の東西を問わず、何処にも見られる現象であろう。語彙の蒐集は入り易いものであるが、又至り難いものでもある。その価値は一方では蒐集率による。即ち当該地域に存する語彙のどれだけを集め得るか、であるが、この観点からいうだけでも△辞書は、一度び刊行は完了しても、決して完成しない▽[3]ものである。のみならず、辞書の質は音韻論、形態論等々、言語学各分野の進歩に相応じ得て、はじめて向上するものであり、更に言語地理の発達した今日では、これと是非とも緊密に提携しなければならない。このような意味で、或は辞書は、言語研究のアルファであり、オメガである、といい得るかもしれない。辞書は、一般にその編輯が労力と忍耐とを高度に要求する難事業であるが、方言辞書ともなれば、その出版は、ほぼ古今東西を問わず、「狭き門」に阻まれるためしであった。

前世紀末に至るドイツ近世の語彙集についての詳細は別稿にゆずり、[4]ここでは概略にとどめる。十七世紀後半に出た「バイエルン語彙集」は方言語彙集として最初のものとされる。十八世紀後半には、はじめて学問的な、大掛りな「ブレーメン語辞典」五巻が、学会の組織力によって著わされた。十九世紀初頭に及び、ドイツの方言研究はシュメラーの出現によって、一挙に科学として成立した。[5]ゲルマン語学の祖、ヤーコプ・グリムによって、彼の方言文法は極めて高く評価[6]されている。シュメラーの「バイエル

ン方言辞典」は一八二七年から刊行された。当時の「現代方言」のみならず、文献資料にあらわれた史的方言をも採録した立派なものである。又辞書編集の技術上からは、通例のABC順を用いず、語根の子音順排列を行なったことも注目すべき点で、この方法は今日でも尚採用されている。(7)

シュメラーのバイエルンにつづいて各地の方言辞書が現われたが、いずれも彼の優れた作品を凌ぎ得るものでなく、総じて十九世紀の方言研究は、世紀末に及んで言語地理的研究の勃興するまで、彼の域を出ることができなかった。シュメラーはドイツ方言研究界のグリムと称せらるべき存在である。更にこの間、グリム兄弟による所謂グリムの大辞典の刊行開始は忘れることができないが、イギリスのNEDに比すべきこの辞典は、今尚未完結であるばかりでなく、方言の観点からは、文字として記録された語のみ収録する方針をとったので、あまり多くを期待することはできないのである。

前記の如く、辞書の質の向上には、文法の各分野の発達が伴わなければならぬ上に、現代の方言辞書については、言語地理の成果が不可欠な成分として要求される。ところでドイツの言語地理的研究は、早くも十九世紀の七十年代から胎動するが、その基盤たる言語地図は、今世紀に入って漸く原稿の目鼻がつきはじめ、その刊行は一九二六年に開始、二代目の責任者のいった〈さしあたっての刊行〉の分、計百二十葉が今日漸く出揃うという有様である。(8)従ってドイツの方言研究はフランスよりも出足がおくれ、今世紀二十年代から漸く現代の実力を発揮するのであり、方言辞書も亦同じ線に沿うことになるのである。

2 現代、地域区劃

言語＝方言研究の進展に伴ない、方言辞書にも当然科学的厳密さと充分な包括、網羅が要求される。他方又言語地理的に方言単位をなすとされる「言語地方」(Sprachlandschaft)の発見に伴なって、一辞書の担当する地域範囲が拡大され、概して一言語地方を一辞書が担当することとなった結果、今日ではかかる広域方言辞書の編集は、最早一個人のなしうる業ではなくなり、細密な調査網と委員会組織とを不可欠とするに至った。その最初の典型は、ドイツ語域で「現代」の先頭を承わる「スイス語辞書」で、一八六二年、多数の協力者の力によって発足、一八八一年から刊行、今次戦前に第十巻を出し、未だ完結に至らない。しかしこれなどは、スイスが独立国として古い歴史をもつことを思えば、その国語の一半がドイツ語の一方言に過ぎなかろうと、既に通常の方言辞書の域を逸脱したものというべきであろう。

ドイツ国内の事情は当時まだそこまで到達していなかった。一八九九年、後に「ドイツ言語地図」(9)に参加、その協力者となったF. Martinはエルザス方言辞書を出した。これが恐らくはドイツの現代方言辞書の最初のものである。ドイツではじめて等語線(Isoglosse)「線の束」(Bündel)を発見したフィッシャーのシュワーベン方言辞書は一九〇四年刊行を開始したが、完結には三十二年間を要した。方言辞書の刊行があらゆる面でいかに難事業であるかを物語る好個の実例であろう。——この三十年間にドイツの言語地理は飛躍的に発展する。その結果、語彙研究は当然言語地理と手を握ることとなり、ライン地方(一九二三年)方言辞書、ヘッセン・ナッサウ

方言辞書[10]（二七年）は、共に言語地図を附するようになった。一方において小地区の方言辞書が夥しく刊行され、他方、ほぼ古代種族住地[11]を単位とする広域のものが相次いで企てられるにつれ、ドイツ全土、否、全ドイツ語域の方言＝国語の網羅、採録――現代の言語学に当然の義務として課せられた重要任務の一つ――への気運は次第に盛り上って来た。

かくして方言辞書の地域劃定の問題は生じた。問題の口火は、一九二五年、バーデン方言辞書の刊行が企てられるに及んで、切られた。Baden はライン上流とシュワルツ・ワルトに挟まれたアレマン方言域を主体とする政治地域であるが、北部はライン・フランク方言に浸蝕され、この方言域とアレマン域の間には（等語）線束が走る。又アレマン域も、シュワーベン方言域と高アレマン方言域とに分たれる。即ち言語的には単位地域たり得ない。従って言語学的には、バーデン方言辞書は成立しない。しかしながら上述の如き方言辞典刊行の非常な困難さ、その事業の実際面からいえば、この方が遙かに便宜、有利である。というよりも、場合によっては、かくの如く行政境界と妥協してのみ、この事業が実現し得ることになる。後に掲げる別表に見られる如く、今日刊行中の広域方言辞典はその殆んど全てが補助金を受けて刊行を行なっているのであるが、この補助金は多くの場合、或はその大部分を行政官公庁に依存しているのである。――問題の核心は、要するに、方言辞書の「刊行」にあるから、この際多少の妥協は避けられない、ということになる。そうなると、ただ方言地理的には、各隣接地方の方言辞書に記載の重複する区域と共に、ややともすれば脱落する地域が出てくる。この脱落だけはぜひとも防がなければならない。そのためには計画的な地域劃定がなされなければならない――。そこで各方言辞書編輯者（何れも大学教授）の全国的会議が開かれ、一九三五年ドイツ全土の方言辞書地域劃定がなされた。この決定に基づき、上掲のヘッセン・ナッサウ方言辞書以下の各辞典の地域に種々の増減が加えられた。要はドイツ語域の方言を百パーセント洩れなく採録し得る区劃を得ることであった。かくしてのみ、「完全なドイツ語辞書」の成立がはじめて可能になるからである。

さて、ここにドイツ方言辞書地域区劃を一覧しようと思うのであるが、そのためには予備知識として、ドイツ方言そのものの状況を知って置く必要があろう。別図を参照されたい。ドイツ方言は、まず南北、アルプスに連なる高地ドイツと、北海、東海に没する低ドイツの二大方言群に分たれ、南部の高地は更に南北、即ち中部、上部両方言群に分たれる。今日の標準語（＝新高地ドイツ語）は主として中部方言を基盤に成立した。ドイツ方言の第二の特徴は、古代種族住地――といっても結局は北方の原住地から南下して手に入れた入植地であるが――を中核とする西部の故地と、十一世紀以降（再）入植した東部の植民地とから構成される点で、両者の境界線は、一口にいえばエルベ河の線である。（エルベはゲルマン＝ドイツ史上幾度か重要な境界となった。）今日の標準語は主としてライプツィヒ方面の植民地方言の上に成立した。別掲の「ドイツ方言区劃図」中、低ドイツで故地のものは西部の二者、即ち低フランク方言と低ザクセン方言（1）、中部は西部の三（1～3）、上部では、使用範囲こそ異なれ、全てが故地のものである。ドイツ方言の第三の特徴は東北方に、更に主として

ドイツ方言区劃図（W. Mitzka, 1943 による）

A　　B　　C　　D　　E

A　低ドイツ，高ドイツ（中部ドイツ＋上部ドイツ）方言境界

B　中部ドイツ，上部ドイツ方言境界

低ドイツの部（ik maken dorp dat appel kind）：—

C　に囲われた内部：フリジア語

D　に囲われた内部：低フランク方言；但し

E　高プロイセン方言（中部方言）

1…低ザクセン方言（ウェストファーレン，オーストファーレンを含む）

2…シュレースウィヒ方言　3…ホルスタイン方言　4…メクレンブルク；前ポメルン方言

5…ブランデンブルク方言　6…東ポメルン方言　7…プロイセン方言

中部ドイツの部：—

1…リプアル方言（ich machen その外は低ドに同じ）

2…モーゼル・フランク方言（ich machen dorf 以下同じ）

3…ライン・ファルツ方言，ヘツセン方言（ich machen dorf das）

4…チューリンゲン・上部ザクセン方言　5…北上部ザクセン方言　6…シュレージエン方言

上部ドイツの部：—

1…東フランク方言（ich machen dorf dors apfel）

2…アレマン方言（低アレマン，高アレマン，最高アレマン，シユワーベンの各方言（ich machen dorf das apfel kind～kchind～chind）

3…バイエルン方言（北，中，南の各方言；方言形2に同じ）

〔註〕印刷の便宜のため細部に亙つては省略が少なくない。

地名の黒点はドイツ語使用地，白点は然らざるものを示す。

東方のポくミヤ・モラヴィア・スロヴァキア・ハンガリー・ルーマニアなどに多数の言語島，即ち孤立せる植民地をもつことで，古いものでは創設が十二世紀に溯るこれら言語島は，彼らが出発した当時の故地の音韻・形態をとどめ——この点については古く哲学者ライプニッツが既に識者の注意を喚起している[12]——，今日でも方言研究と語史研究とを繋ぐ不可欠の貴重な鍵となっている。しかし別掲図では，便宜上，これら言語島の記載は全く省略した。

お断りして置かなければならないのは，この区劃図も，次に掲げる辞書地域区劃と共に，今次大戦終了前現在のものであることである。当時のナチ・ドイツはチェコのプラハにも，ポーランドのポーゼン(=ポズナン)にも大学を経営し，内には例の純血運動の一環として，方言＝民俗研究を大いに鼓励，鼓舞していた。戦後の現状は周知の如く，悉く粉砕し，刻々に推移して見定め難く，ドイツですら，かかる問題についての学問的発表，報告は殆んど未だ見受けられない。方言辞書についても，特に前記の「外地」で編輯中であったものについては，編集者自体の安否もさることながら，貴重な原稿の失なわれたものも，或は少なくないのではないか，と案じられる次第である。

ドイツ方言辞書とその地域区劃　(1943現在)

地域	編集責任者	出版地(編集地)	備考(年号は出版のそれ)
A. 上部ドイツ:—I):—			
—1. バイヱルン	J. A. Schmeller	Stuttgart-Tübingen	新版 1872ff.; 1940.
同上	O. Basler	(ミュンヘン)	補助金交付
—2. オーストリア	A. Pfalz	(ウィーン)	同上
II) アレマン:—3. スイス	F. Staub, L. Tobler	Frauenfeld	1881ff. 第10巻('40?)まで刊行
同上	Hotzenköcherle	(ツューリヒ)	補助金交付
—4. シュワーベン	H Fischer†-W. Pfleiderer	Tübingen	全6巻, 1904〜'36. Pfleiderer の手で改訂増補中 (Stuttgart)
—5. バーデン	E. Ochs	Lahr i. Baden	1925ff. 第1〜16分冊('55)
—6. ヱルザス	E. Martin, H. Lienhart	Strassburg	全2巻. 1899, 1907
同上	(Fr. Maurer?)	(Freiburg i. Br.)	補助金交付, 印刷にかかる
—7. Vorarlberg(Tirol),	L. Jutz	(Graz)	

Liechtenstein			
Ⅲ):—8.東フランク	Fr. Stroh	(Erlangen)	補助金交付
B. 中部ドイツ:—Ⅵ)ライン地方:—			
—9.ライン・ファルツ	E. Christmann	(Kaiserslautern)	補助金交付
—10.ロートリンゲン	M. F. Follmamn	ライプツィヒ	1909.
—10a.ザール・ブリュッケン地方	F. Schön	Saarbrücken	全2巻, 1922.
ライン			
—11.(=中部フランク)	J. Müller-K. Meisen	ボン (Bonn)	1923ff. 補助金交付, 第1〜104分冊('54)
—11a.トリール地区	P. Christa	Honnef am Rhein	1927.
—12.ルクセンブルク	不明	Luxemburg	1908.
同上	H. Palgen	同上 (Luxemb.)	1950ff.
—13.南ヘッセン	A. Götze†-Fr. Stroh	(Erlangen)	補助金交付
—14.ヘッセン・ナッサウ	Fr. Wrede†-L. Berthold	Marburg	1927ff. 第1〜19分冊 ('40?)
Ⅴ) 中央部:—15.チューリンゲン	L. Hertel	Weimar	1895.
同上	H. Hucke	(Jena)	補助金交付 (戦時中原稿喪失!)
—16.上部ザクセン	K. Müller-Fraureuth	ライプツィヒ	全2巻, 1911〜'14. Erzgebirge 地方を含む
同上	Schier	(同上)	補助金交付 (戦時中原稿喪失!)
Ⅵ) 東部:—17.シュレージェン	Th. Siebs†-W. Jungandreas	ブレスラウ	1935ff. 補助金交付, 第1〜5分冊 ('38)
C. 低地ドイツ:—Ⅶ西部:—			
—18.低ザクセン	(H. Neumann?)	Neumünster (Göttingen)	1949ff. 補助金交付, 第1〜3分冊 ('55)
リューネブルク平地 —18a.	E. Kück	Neumünster	第1巻 ('42)
—18b ハンブルク	(Teske? A. Lasch?)	(Hamburg)	

—19. ウェストファーレン	F. Woeste-E. Nörrenberg	Nordeti-Leipzig	第2版（'30）
同上	Wm. Foerste	（Münsteri. Westf.）	補助金交付
—19a. Siegerland	J Heinzerling, H. Reuter	Siegen	1939.
シュレースウィヒ・	K. Mensing	Neumünster（Kiel）	全5巻，1925～'35.
Ⅶ）中央部：—20 ホルスタイン			
エルベ河中流域	K. Bischoff	（Halle）	Sachsen の一部を含む，補助金下付
—21.（＝オーストファーレン）			
ベルリン・ブランデンブ	A. Bretschneider	（ベルリン）	補助金交付
—22. ルク			
ブランデンブルク	H. Teuchert	（Rostock）	恐らく上記 22 と合同するものと想像される
—23. メクレンブルク	R. Wossidlo, H. Teuchert	Neumünster（Rostock）	補助金交付，1937ff.
—24. ポメルン	Rosenfeld	（Greifswald）	補助金交付
Ⅸ）東部：—25. プロイセン	W. Ziesemer	Königsberg	1935ff. 補助金交付（戦時中原稿喪失！）

D．東北方，東方言語島：—Ⅹ）東北方：—

—26. ワルテ河地方	W. Jungandreas, L. Mackensen	（Posen）	
グレンツ・マルク（ポー	Stritzel†	（Schneidemühl）	補助金交付，Stritzel の後任不明
—27. ランド国境）			
—28. バルト地方	Masing	（Posen）	補助金交付
—29. Wilamovicze	H. Mojmir-A. Kleckouski,	Krakau	全2巻，1930，'36.
	H. Arders	（プラーク）	補助金交付（戦時中原稿喪失！）
Ⅺ）東方：—30. ズデーテン	E. Schwarz	（Aszod＝ブダペスト在）	（戦時中原稿喪失！—以上 1952年，Mitzka による）
—31. Oberzips（スロヴァキア）	Greb		
Siebenbürgen-Sachsen	A. Schullerus, G. Keitzel	Hermannstadt	全2巻，1908ff
—32.（ルーマニア）			
同上	Holtzträger	（同上）	補助金交付
—32a. 同北部	F. Krauss	（Mainz）	

Gottschee —33.（ユーゴー）　K. J. Schröer　ウィーン　1869f.

3　ドイツの大学と方言研究

右の辞書地域区劃表に挙げられた編輯責任者は殆んど全て大学教授で、資料、カードなどの保存、整理、編輯などには、何れも大学所属の研究所等が充てられ、又編輯陣はそれぞれ研究所員を以て構成されている模様である。都市においても、ケルン、フランクフルト、ハンブルクには、それぞれ既に、それ自体の蒐集所が設けられた。ドイツ――のみでなく、一般に欧洲――では従来から自国語の読み、書き、話しの充分な習得が、独り国語科にとどまらず、学校の諸学科の成績を左右する基本として要求されて来たが、更に一九四〇年からは、ドイツ国内の中等学校教員「国語」科資格として、「能う限り自己の調査・研究に基づく方言の知識」に関して試験を課せられるべきことが、命令として公布された。又大学でも、新たに、方言研究の専攻で、学位（Dr. phil.）を取得し得ることとなった。加うるに、前掲の如く、現に刊行乃至編集中の広域方言辞書の殆んど全てに補助金が交付されている――植民地のそれに対してさえも！――こととといい、かかる真の祖国愛の貴重な布石を行なったことはナチの偉大な功績――筆者は固よりナチの犯した罪業を認めるものであるとはいえ――と称せられるに堪えうるものとして、まことに羨望に堪えず、同時に又我々日本人の心の行方についても力強き参考となるべきことを、且つ信じ且つ期待するわけである。

大学では、「ドイツ言語地図」研究所を擁するマールブルクをはじめ、独自の方言研究施設をもつものが少なくない。これは一つにはドイツの大学が土地生えぬきの施設として、それぞれその地方と地方人から浮上って居らず、堂々たる伝統[13]の下に郷土愛を誇っている事実も見逃してはなるまい。これらの中で特に活躍している教授達は、マールブルクの「言語地図」第三代の責任者たるミツカ(Walther MITZKA)をはじめ、その殆んど全てが前掲区劃表に責任者として掲げられた人々である。[14] 研究所としては「郷土研究所」（Heimatinstitut）[15]と称する綜合的なものも多く、これらにおいては、方言のみならず、地名研究、[16]民俗研究、更に低地東部のそれでは、ドイツ騎士団史の文献的研究など多方面の調査研究が行なわれる。――いい換えれば、ドイツにおいても方言研究――と民俗研究――の発足したのが民間研究の形においてであったことは、本邦におけると異ならないが、「ドイツ言語地図」が発足した当時（一八七六）以降、殊に今世紀初頭以降は、大学が完全に研究の主導権を握り、方言研究は、当然のこととはいえ、今日の国語研究の主体となり、核心となっているのである。三十年以前に刊行されたベハーゲルのドイツ語史が今日尚斯学の権威書と目される所以は、従来の語史と異なり、所謂語史研究と方言研究とが、この老学徒の深い造詣を以て、いわば打って一丸とされた点にあり、ここには今後の語史研究の方向が力強く打ち出されている、と考えられるのである。爾後の語史界が、「今日

ドイツ語史を編もうとすることは、前世紀におけるよりももっと冒険である」と一当事者をしていわしめるほどの目覚ましき発展を続け、ゲルマン・ドイツ語史の重要な一部分を殆んど書き換えるに至ったことも、[17]六十年間生みの悩みを悩んだ挙句、五万地点に上る調査網を擁して成立した「ドイツ言語地図」を中心とする言語地理研究と共に、上掲の如き徹底的な、地域的に完全な語彙蒐集の難事業、基礎作業あってはじめて可能であった、と考えて決して行き過ぎではあるまい。

4　低ザクセン辞書の例

実例を一つ挙げたい。本書はゲッチンゲン大学の創意によるもので、一九三五年、同大学のドイツ語科研究室に辞書事務局が設けられ、責任者として、マールブルク大学「言語地図」研究所から、所長ミッカ教授の推薦で、ヤンセン(Hans JANSSEN)が来任した。彼は、一九三五～三八、八枚の調査表を発した。低ザクセン全土の教員はこれに記載して返送した。Janssen はこれを整理して語地図[18]を作成し、又現地で写真撮影などを行なった。その間に回答者の中から、次第に熱心な、貴重な協力者が続出し、彼らによって調査表以外の多くの語彙が集められた。第二次大戦に際して、本書の事業は危く挫折しかけた。何よりの痛手は、責任者たる Jansen が空爆下に行方不明となったことであった。終戦の年、十二月、大学哲学部教授会は、ユングアンドレーアス教授(Wolfgang JUNGANDREAS, 終戦時ギーセン大学)にこの事業の継続を依頼した。Jungandreas は、戦前までシュレージェン辞書、又戦時中はワルテ河地方方言辞書の編集に携わっていた多忙の身でこれを引受けた。又、前記の協力者達を母胎として「低ザクセン方言研究会」が誕生し、一層の協力が与えられた。

低ザクセンは行政的にハノーヴァ、オルデンブルク、ブラウンシュヴァイク、シャウムブルク・リッペ、リッペ、ブレーメンの六郡より成り、面積五万平方粁弱、人口五百万弱の地域(一九三六～三八現在)であるが、本書の担当地域はこれより広く、西はオランダ語に代表される低フランク方言、東はシュレースウィヒ・ホルスタインに接し、又北方は北海沿岸の北フリジア語を含めるものである。収容予定語数の記載はないが、五巻に上るシュレースウィヒ・ホルスタイン方言辞書に achter-(=英語after)を冠した語約百二十語が採録されたのに対して、本書は約三百八十語、即ち三倍余に達する筈である。以てその語数の莫大なるを推測するに足りよう。地域内の方言差は、他の地域(特に高地)に比して僅少であるという。[19]

財政的には、人件費は前記六郡中の三郡とドイツ研究共同体とが、事務費は大学が補助した。地域内の四八ヶ市町村もこの事業を補助し、更に「低ザクセン機械商工会」なる団体でさえ、四八年、「相当額」の寄附金を寄せた。――一地域方言辞書に関するこのあたりの事情は、まことに羨望に堪えぬものがある。

かかる基礎の上に、一九五三年、発足以来十八年にして「低ザクセン辞書」は第一分冊を刊行した。辞書版(27.5×19.5cm)、二欄組で百二十八欄(a～afbuchten)を収める。冒頭の文献表は九ページに亙り、しかもその一々に、文書源からの語彙筆録者名、更にこの筆録草稿を短縮せる者の名が附記された周到な用意には感服させられる。挿図合計三十一個、内五個は語地図。漁

具の図一個に、寸法も記載してあるあたりは、さながら民俗辞典の如き配慮である。編輯者の述べる通り、一語の説明のために、その用いられた詩歌の一節全文が掲げられる。〈というのも、一語の精神内容は、一行動、或は一思考過程の生きた枠にはめられて、はじめて一目瞭然となるものであるからである。〉——これはゆとりなき現代における、実にぜい沢な奥床しさではないか。筆者は楽しく続刊を期待した。

第二分冊は翌五四年に出た（Abbuddein／Erwinnen）。体裁、分量は同様であるが、巻頭に通告がある。それによると、昨五三年中に第三分冊まで出す希望であったが果し得なかった。それは経済上——と明言はないが——更に内容の短縮を必要としたからで、編輯方針は変更され、Jungandreas は同五三年秋に本書から去った——というのである。これ以上の事情は固より知る由もないが、ここに述べられただけでも、問題は二つある。一つは編輯方針の衝突で、これは筆者の今日云為し得ざることであるが、これも経済問題に端を発する、と想像することも、強ち無理とはいえまい。でなければ、かくの如き大変更は当然刊行開始前になされなければならなかった筈である。もう一つは短縮のことである。二十年近い綿密な編輯と、上記の如き、我々としては羨望に堪えないほどの支持、援助を以てしても、本書が、刊行開始後の今日、短縮を余儀なくされるとは、ドイツにおいてすら、方言辞書が担わなければならぬ宿命的悲劇ともいうべきであろうか。低ザクセン方言は、東部に対しては低フランク方言と並んで故地方言であり、高地ドイツ方言に対しては、後者が所謂「高地ドイツ子音推移」によって変貌した末、今日のドイツ語の直系親となったのに対し、この推移を示さない点で古代ゲルマン語直系ともいうべき、かけ換えのない重要性をになうものであるから、本書が刊行される以上は、実は筆者にとってさえ、能う限り網羅的であることが希望されるのである。——が、これは所謂望蜀の嘆かもしれない。とも角もこれだけ尨大な——第三分冊（Erwinnen／Luststern）でまだAの項が終らない！——地域方言辞書が、あたかも東条教授の全国及び分類方言辞典と相前後し、しかも第二十三番目の広域方言辞書として出版されつつある事実については、日本人たる筆者にとって感慨に堪えざるものがある。

5 結び

1 調査表を用いる間接作業は、ドイツでは、辞書のみならず、言語地図の測量にあたって、既に用いられた（固よりドイツでも、今日までの地域方言辞書の全てがこれで作り上げられたのではないと想像されるが。）間接調査が直接のそれ、研究者、採録者自身が現地へ出かけての採録、調査に比し、その正確さ、厳密さの点で劣る次善の方法たるはいうまでもない。しかし言語地図においても、ドイツの場合の如く、測量地点が多数——五万地点以上！——に上る場合には、真にやむを得ざる点で、[20] 最善の方法と称するを得よう。他方、調査・採録地点を多数もつことが、もう一つの不可欠条件となることは、ドイツの例が物語るところである。方言辞書においても、語彙研究も亦言語地理と提携せざるを得なくなった今日では、一小地区においてならばいざ知らず、県・国単位程度の地域方言辞典においても、今後出るべき包括的、網羅的な科学的辞典は、やはり一定様式の調査表による標準

測量を規準とし、これに現地における直接調査の裏付けを行なって行くべきではあるまいか。少なくとも、調査表を用いずしては、語地図を作製し得ず、無理をすれば、無理の分だけ学問的価値は減ぜざるを得ないのである。

2 方言辞書区域の劃定は、本邦でも能う限り速やかに行なわれなければならないであろう。例えば、全国の国立大学を目安に、一応その担当地域を定めることも可能であろう。域内では、高校の学区を大地区、中・小学校の学区を小地区と分ち、かかる基盤の上に委員会を構成し、各地区の研究者を洩れなくこれに含める、——といった理想案に幾分とも近似した計画を可能ならしめるが如き財政的裏打ち、その背後に、またこれを可能ならしめるための識者と輿論、かかるものは、全国各地に散在する全方言研究者の情熱と団結の力とねばりとを以てしても、果して動かし得ないものであろうか。——それはとに角、この際見習わなければならぬことは、本邦全土の方言（及び民俗）を洩れなく採録し得る如き地域劃定その他の計画をば、ぜひ今のうちに樹て、今後生ずべき不必要な重複やら脱落やら、はては縄張り争いにも似た不快事やらを予め防止し、能う限りのエネルギーをば最大多数語彙の蒐集と、資料の吟味、編輯の技術的向上のために振り向けなければならないことである。この劃定は、しかしながら必然的に、単位地域の大きさがいかにあるべきかの問題に関連する。

3 単位地域の規模は、しかしながら、当然言語地方（Sprachlandschaft）のそれに還元される。言語地域は、言語地図に基づく（等語）線束の存在により、中核地方（Kernlande）と縁辺地方（Saumlands.）の識別によって成立する。[71] これらの概念がドイツで非常に明確に把握せられ、非常に有効に用いられたことについては、その方言・民族の成立史の事情が然らしめることは勿論であるが、他方、測量網の密度の高かったことも、大きく作用していることは否めない。試みにドイツの例に習って、全国の小学校教員諸氏の好意を動員し得るならば、「日本言語地図」は、既にそれだけで、二万強（一九五三年現在）の測量網をもつことになる。この数は、ドイツのそれに比すれば五分の二にしか当らないが、しかしジリエロンの「フランス言語地図」に対しては、優に二十倍を上廻るものである。地域方言辞書も亦かかる基盤に立って、はじめて完全なものたり得る可能性を与えられよう。筆者の秘やかな願いと期待は、せめてこの程度の密度の測量網の上に、周到な同一計画に発して、同時に、日本言語地図と各地域方言辞典とが、近き将来に誕生することに外ならない。最後に、前掲「低ザクセン方言辞典」の、今は去った編輯者が、同書への序文を結ぶ言葉をひき、方言辞典なるもののあり方について考えてみるよすがとしたい。〈このように本書は学徒にも、また地方の児童にも等しく役立つものである。従って本書は学問的な参考の書たるのみでなく、低ザクセンの農民、手工業者、教師の家庭に備えられ、親しまれるものでなければならない。父祖の用いた言葉はここに見出されようし、故郷の風物は語りかけ、繰り返し繰り返しその富を更めて示すであろう。我々から外面的光輝の失われたこの時代に、昔話が相も変らず我々を訪れ、我が民族性の表徴として親しまれ、その宝とされると同じく、ドイツの心が、その実直さと素朴さ、その誠実と純真さを以て、我々の胸を打たんことを、と希うものである。〉（圏点訳者）

（本稿は昭和三十九年度文部省助成研究の一部である。）
= 15. I 1955; 30. IV '55 短縮改稿 =

〔註〕

①〈ドイツにおいては言語地理が綜合に走り、純粋言語学の領域を逸脱せんとするに対して、云々〉 JABERG, K., *Aspects géographique du langage*, Paris 1936, p.13—Pop.S., *La dialectologie*, p. 737 による。

②ドーザ著、松原秀治訳「言語地理学」1938, p. 30ff.

③MITZKA, W., *Deutsche Mundarten*, Heidelberg 1943, S.146f.

④拙稿「ドイツ方言研究史」の内、一、前史、四、シュメラーと方言学の成立、五、史的文法（未刊行）

⑤SCHMELLER, Joh. Andr., *Die Mundarten Bayerns grammatisch dargestellt*, München 1821. 新版：Hrsg. von O. Mausser, München 1929.

⑥〈Schmeller のバイエルン方言に関する素晴しい本を…貴兄も早く買わなければいけません、云々〉 Karl Lachmann 宛書簡の一節——STROH, Fr., *Handbuch der germanischen Philologie*, Berlin 1952, S. 144.

⑦例えば：Schweizerisches Idiotikon（後述）

⑧この間の事情とこれをめぐる研究史については、拙稿「ドイツ言語地図」の成立をめぐるドイツ方言研究史——一八七六～一九一一」＝アカデミア、第八集（一九五四・一二月）所載＝参照。

⑨言語「地図」の語を用いる点について、この際釈明したい。Linguistic Atlas, Atlas linguistique, Sprachatlas に対し、従来は言語「図巻」、一葉一葉の carte に対して「地図」の語が充てられて来た（小林英夫「方言学・その理論と実際」〈言語学方法論考〉所載、1935, p. 531）。絵巻物などの「巻物」でない近代の所謂地図帖には、新たな命名に関する限り、「巻」は凝りすぎて却って実情に即さなく上、元来地図である——等高線や道路などこそ記載されないとはいえ——からには、「地」の語はむしろ必要な規定語である。従って筆者は、敢えて慣用を無視して、atlas に「地図」、その一葉一葉に「図」の語を用いるものである。

⑩*Hessen-Nassauisches Volkswörterbuch*, hrsg. von F. Wrede, L. Berthold, Marburg 1927ff：第一巻未刊、第二巻・完了、第三巻第一六～一九分冊まで刊行。因みに編者 Berthold には、方言辞書と言語地理との提携の要を説いた論文がある：*Die wortgeographische Forderung und die Programme der modernen deutschen Mundartwörterbücher*, in：Teuthonista 1 (1924/25), S. 222ff. その他。

⑪ドイツ方言の現況は後述の如くであるが、その内西部、西南部において、Bayern 方言域は同族、Alemann 方言域は同族、ライン地方はフランク族、低ザクセン方言域は古ザクセン族の、ほぼそれぞれの「種族地域」にあたるとされて来ている。この種族地域と現代方言地域の問題は、拙稿「古代種族地域と現代方言地域」（未刊行）において取り上げられている。

⑫LEIBNIZ：*Unvorgreifliche Gedanken betr. die Ausübung*

und Verbesserung der deutschen Sprache, 1697.

⑬例えば創立の年をみても：Prag 1348, Wien 1365, Heidelberg 1386, Köln 1388, Erfurt 1392, 以下：十五世紀五学、十六世紀七学、十七世紀三学、十八世紀三学、十九世紀三学、而して二十世紀六学、となっている。但しこの中にはその後閉鎖となったもの（Breslau, Köln, Erfurt, Giessen, Frankfurt a. d. O.）なども含まれる。

⑭区劃表に挙げられない中で逸すべからざるものとして：Th. Frings（当時 Leipzig）, A. Buch（現在多分Strassburg）Krarmayer（Graz；バイエルン地域辞書の蒐集責任者、同時に民俗学者）などがある。

⑮この種の施設のある大学は、低地：Hamburg, Kiel, Rostock, Greifswald, Königsberg,（Münster, Göttingen）中部：Bonn,（Marburg, Leipzig）, 上部：Erlangen,（Freiburg, München.）など。括弧内は別の施設。

⑯ドイツでは固有名研究は別個の独立部門として扱われる。BACH, A., *Deutsche Namenkunde*, Heidelberg 1952ff. 全四巻。SCHWARZ, E., *Deutsche Namenforschung*, 2Bde., Göttingen 1950. などはその主な成果の結集である。

⑰この間の事情については拙稿「西ゲルマン語とドイツ語」〈ドイツ文学〉第九号（一九五二、一一月）所載、同「南ゲルマンについて」〈アカデミア〉第十号（一九五五、七月）所載参照。

⑱Wortatlas. ドイツの言語地理では、「ドイツ言語地図」発足当時の経緯から、音韻関係の Sprachatlas と語彙関係の「語地図」とが分たれねばならなかった。一口にいえば、その原因は、Sprachatlas の調査表に発音符号を用いず、慣例の標準語乃至方言の正書法に従ったことと、調査内容が文章のみで、語彙を用意しなかったことにある。前掲拙稿参照。

⑲代表的な土地について例を挙げると、*Osnabrück*: Schaup *Stader*: Schop, *Ostfalen*: Schop で、これらは見出語 Schap（標準語 Schaf, 英語 sheep）に一括される。文章の例をとれば、標準語：Als heute mein Bruder kam, war mir der schöne Löffel abgebrochen（英語にそのまま置きかえれば：*As*（＝When）today my brother came, was *me the pretty*（＝my pr.）spoon broken-off.）は *Westfalen*: Osse dünndach mäin Brauer kam, wor mäi de wackere Liäpel awwebruocken. *Ostfriesen*: As vandage mien Bröer quam, weer mi de mooje Läpel ofbraken. *Ostfalen*: As huite mien Brauder kamm, was mek de schäne Leppel awwebroken. *Stader*: As vandog mien Broer köm, wör mi de schöne Läbel afbrogn.

⑳グリエロンの「フランス言語地図」では、直接作業により、エドモンなる稀有の優秀な測量者が、六三九地点（Dauzat 前掲訳書によれば六三八）を五年間でなしとげている。その中一年間の最高は一八二（一八九八年）地点である。仮りにこの最高を二〇〇に上げても、五万地点の測量には、一個人で、何と二百五十年間、平均一五〇地点に見積れば、実に三百年間を要するのである！

㉑前掲拙稿（註八）参照。

——南山大学助教授——